

2-1 日本

国の幼児教育カリキュラム・ガイドライン

日本の現行のナショナル・カリキュラム・ガイドラインである、「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下、要領・指針とする）は、2017年に告示された。子どもの主体的な活動が大切にされ、環境を通して行うことが基本とされてきた明治以降の伝統を継承しつつ、現行の要領・指針（2017）のいずれにおいても、幼児教育が生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものとして位置づけられており、幼児期の特性を踏まえて、内容や方法が考えられることとなっている。

カリキュラム・ガイドライン内でのレジリエンスや関連する社会情動的スキルの扱われ方

日本の要領・指針においては「レジリエンス」ということばが使われているわけではないが、例えば、幼稚園教育要領の前文では「一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる」とある。ここでは、個々の尊厳のもと、協働しつつ、社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の作り手となること、つまり、いわゆるレジリエンスを含めた生きる力を育むことが明示されている。

保育の内容については、日本のナショナル・カリキュラム・ガイドラインは、小学校以降の教科教育を中心とするコンテンツ・ベースのものではなく、資質・能力ベースのものである。同ガイドラインでは、園において「育みたい資質・能力」と、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されている。

育みたい資質・能力

- | | |
|---|---|
| 1 | 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識および技能の基礎」 |
| 2 | 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」 |
| 3 | 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」 |

日本の要領・指針では、園における教育において育みたい資質・能力を、幼児の生活する姿から「ねらい」がとらえられている。そしてその「ねらい」を達成するために指導する事項が内容として、5つの領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）で示されている。なお、それらは、教科などの内容別に展開する教育とは異なり、園での子どもの生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであることが示されている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には、レジリエンスと深くかかわる内容がみられる。例えば、（2）自立心には「諦めずにやり遂げること」、（4）道徳性・規範意識の芽生えには「自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付け」ることなどが挙げられている。



日本の調査結果のポイント

①「社会情動的スキル」「レジリエンス」の用語の認知・解釈

保育者の「社会情動的スキル（非認知スキル）」の認知度は研修での学びを通して高かったものの、「レジリエンス」については、用語の認知度は低かった。ただし、「レジリエンス」の用語の意味を伝え、保育者が共通して、日々の保育の中でとても大切にしていることであると認識していた。

②園におけるレジリエンスを育む実践・活動の実施状況

多くの保育者は、プログラムや教材を介してではなく、子どもが日々の生活で遭遇する挑戦や友達、仲間とのいざこざを通じて、レジリエンスを育てていると述べていた。共通する回答として、子どもの気持ちを保育者が受け止めることの重要性が強調されていた。また、自分の気持ちを表現できるように支援し、相手の気持ちを理解することも、重要な支援として挙げられていた。さらに、子どもたちの異なる考えを尊重し、その場で即座に解決するのではなく、折り合いをつける方法を保育者と共に模索すること、成長に伴い、子どもたちが自身で問題解決するよう図ったり、折り合いをつけたりすることを目指している様子が伺えた。新しいことへの挑戦に対しては、小さなステップで徐々に成功体験を積むことが、あきらめない気持ちや見通しをもつことと考え、保育者が意識している様子が伺えた。加えて、友達と教え合ったり、友達を見て学んだり、友達の頑張っている様子から励まされたりすることなど、友達の存在自体も大きな支えとして挙げられていた。保育の中で、子どもたちが直面する困難や葛藤を避けるのではなく、ストレスを感じながらも自分たちなりの対処方法を見つけていくことを重視していた。





2-2 中国

現在の中国における幼児教育の政策方針

中国政府が2010年に幼児教育の普及を提唱して以来、幼児教育は「普遍的アクセスと質」を確保する過程を経てきたが、現在は高水準の質を追求する重要な時期を迎えている。高水準の幼児教育とは、すべての未就学児に普遍的かつ高品質の幼児教育を提供し、道徳、知性、体の健康、美的感覚、作業能力の総合的な発達により社会主義建設の継承者とならしめることを意味する。公平な幼児教育が広く提唱される一方で、未就学児の心身の健康や社会性の発達にも多くの注意が向けられている。

社会情動的スキルとレジリエンスに関連する政策文書の意図

中国教育部が2012年に発行した「3～6歳児の学習と発達に関するガイドライン」では、社会分野における幼児の学習と発達のプロセスは、社会性を継続的に向上させ、人格の健全な基礎を築くプロセスであると明確に述べている。対人コミュニケーションと社会的適応力は、幼児の社会的学習の中核であり、社会性発達の基本的な工程でもある。幼児の精神的健康の発達を促進するには、温かくリラックスした心理的環境を作り、幼児の安心感と信頼感を育むことに重点が置かれる。家庭、幼稚園、社会が連携して、幼児のために温かく思いやりに満ちた平等な家庭と集団生活の環境を作り、良好な親子関係、保育者と園児の関係、友達関係を確立することにより、幼児が前向きで健全な対人関係において安心感と信頼感を得て、自信と自己肯定感を育めるよう示されている。さらに、幼児が感情を適切に表現し、制御する方法を学ぶことを手助けする必要性についても強調している。幼児に他者と感情を共有するよう励まし、自らの感情を表現させ、適切な指導を提供する。子どもが落ち込んでいる時は積極的に事情を尋ね、否定的な感情を払拭できるよう手助けすることとしている。

中国教育部が2022年に発行した「幼児保育・教育の品質評価ガイドライン」では、「保育者は前向きかつ楽観的で幸福な感情を維持し、友好的で支援的な態度と行動で子どもたちに接し、すべての子どもを平等に扱わなくてはならない。子どもが日常の活動で自信と落ち着きを感じ、自信をもって自らの感情や様々な意見を率直に表現できるようにしなくてはならない」と述べている。



中国の調査結果のポイント

①「社会情動的スキル」「レジリエンス」の用語の認知・解釈

園長たちは幼児の社会情動的スキルについてある程度理解しており、感情認識、感情マネジメント、共感力の3要素、そしてレジリエンスに関連付けていることが分かった。一方、現場の保育者たちにとって社会情動的スキルは馴染みのない言葉であった。園長たちは、幼児の育成方法において、能力、年齢、浸透性の観点から、自らの文化伝統を取り入れ、幼児の社会情動的スキルを育むことが必要であると考えていた。園長たちは「自己治癒力」や「自己管理・抑制」などの側面からレジリエンスの意味を理解することに重点を置いていた。現場の保育者たちはレジリエンスという言葉をはほとんど知らなかったが、「レジリエンス」の2つの側面、つまり「スムーズな適応」や「回復」の状況とも関わる「困難」や「逆境」について、比較的よく理解していた。

②園におけるレジリエンスを育む実践・活動の実施状況

「社会情動的スキル」や「レジリエンス」の知識の応用について調査した結果、この調査に参加した園長や保育者たちは現場の実践においてレジリエンスの概念をあまり応用していないことが判明した。また、中国の県級幼稚園ではレジリエンスという概念の応用、手法、教材が依然として不足していることが分かった。

※中国の行政区分は、省級・地級・県級・郷級の4層制となっている。



2-3 インドネシア

コロナ禍がインドネシアの教育システムやカリキュラムに及ぼした影響

2020年に勃発した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックはインドネシアの教育システムにも打撃を与え、読み書きや計算能力の大幅な学習喪失などが見られた。学校や園では子どもたちへの直接的な接触が制限され、カリキュラム体制を変更することが余儀なくされた。その結果、インドネシアの以前の国家カリキュラムである「2013年カリキュラム」は、学校や園が3つの教育スキームから選択できるように改訂された。1つ目はパンデミック以前に実施されていた「2013年カリキュラム」、2つ目は「Kurikulum Darurat（緊急時カリキュラム）」（「2013年カリキュラム」の簡略版）、3つ目は「プロトタイプカリキュラム」（プロジェクトベースの学習により学習喪失からの回復を支援するコンピテンシー重視のカリキュラム）である。

現在、インドネシア教育省は「プロトタイプカリキュラム」を発展させた「MERDEKAカリキュラム」をあらゆる教育課程（幼児教育を含む）において段階的に導入している。「MERDEKAカリキュラム」は、学校や園が生徒の潜在能力に応じた学習を開発できるように意図したものである。インドネシアの幼児教育カリキュラムは、子どもの様々な発達側面やSTPPAにおいて、宗教・道徳上の価値観、建国五原則（Pancasila）の価値観、身体運動、認知、言語、社会情動面など、包括的な発達を促進するよう設計されている。この理念は、教育文化大臣令2023年第5号「幼児教育、初等教育、中等教育における卒業要件基準」にも述べられている。この「MERDEKAカリキュラム」は子どもたちが次の教育段階に進む前に堅固な基礎を築くことを目的としている。

※STPPA（Standar Tingkat Pencapaian Perkembangan Anak Usia Dini：幼児期の発達到達度基準）はインドネシア政府が定める基準で、子どもが発達と成長のあらゆる側面において到達している能力やスキルの指標。

※Pancasilaはインドネシア人が信じているイデオロギーで、その価値観は神性、人間性、統一、民主主義、正義を指す。

カリキュラム・ガイドライン内でのレジリエンスや関連する社会情動的スキルの扱われ方

教育文化大臣令2014年第137号「幼児教育国家基準」では、幼児期の社会情動的発達について具体的な説明が述べられている。特に、年齢層（生後3か月から6歳まで）に基づいた幼児期の社会情動的発達について記述されており、自己認識（自分の能力、感情、自制心を認識する能力や他者に適応する能力）、自分と他者に対する責任感、社会性のある行動などが取り上げられている。レジリエンスについてはカリキュラムの中で明確な言及はないが、「MERDEKAカリキュラム」のプロジェクトベースの学習プロセスでは、子どもが失敗を経験し、自分で解決策を探ることができるようになっている。クラスメートとの社会的な活動には社会情動的スキルも関わってくる。いずれも幼児期におけるレジリエンスの発達を促すものである。さらに、保育者は就労前と就労中に研修を受講し、社会情動的スキルの概念、子どもの社会情動的スキルのマイルストーンが年齢ごとにどのように結びついているか、こうした社会情動的スキルをどのように育成するかについて学ぶ。従って、子どもの社会情動的スキルの概念は保育者たちに広く理解されている。

文化的背景が幼児教育・保育に及ぼす影響

政府の政策とは別に、インドネシアの文化もまた、質の高い幼児教育・保育を創出するためのプロセスに影響を及ぼす。文化的特徴は、組織的な構造や運営者の観点から、幼児教育・保育で用いる教育・学習のアプローチや、幼児教育・保育施設の運営方法にも影響を与えている。例えば、インドネシア文化では集団性やコミュニティが重視されているが、そのことが教室の集団学習にも表れている。また、インドネシアでは年長者を敬う文化があるが、これも教室の規律と行動管理を形成する礎となっている。幼児教育・保育施設の運営スタイルは階層や権威を尊重する文化の影響を受けており、施設の運営者は意思決定やコミュニケーションにおいて権威主義的なアプローチをとる傾向がある。運営者はこうした文化を理解した上で、戦略的に施設のスタッフを率いていくことが不可欠となる。



インドネシアの調査結果のポイント

①「社会情動的スキル」「レジリエンス」の用語の認知・解釈

調査対象の保育者たちは社会情動的スキルとレジリエンスが幼児期において非常に重要であることを理解していた。こうしたスキルは、社会的インタラクションや自己抑制において、そして、様々な社会的困難（新しい場所での適応など）に直面した場合において、園児が必要とするものである。しかし、保育者たちにとって、これらのスキルに対する深い知識の欠如や、保育者養成課程における概念的な資料の不足などが足かせとなっており、インターネット、書籍、文献、ディスカッションを通じて独自に学習していることが判明した。

②園におけるレジリエンスを育む実践・活動の実施状況

社会情動的スキルは、カリキュラムにも記載されているように、学習における発達活動の焦点となっている。一方、レジリエンスに関しては、レジリエンス強化のために特別なプログラムを実施しているのは8か所の幼稚園のうち1か所のみであった。ただし、その園以外の保育者たちが幼稚園で行っている活動には、子どものレジリエンスを強化するような学習活動も含まれていた。

【出典】ソフィア・ハルタティ、ヌルル・ショフィアティン・ズーロ (2025). 【インドネシア】子どものレジリエンスと社会情動的スキルに対するインドネシアの保育者の認識と取り組み.
<https://www.blog.crn.or.jp/lab/10/58.html>





2-4 マレーシア

幼児教育の政策

マレーシアでは、正規の教育は4歳で通園することから始まる。ただし、義務教育ではない。6歳未満の子どもも多くは、正規の学校制度に入る前の準備段階として、幼稚園に入園する。マレーシアの幼児教育（ECE）は2つの年齢グループで構成される。4歳以下の子どもは「TASKA」と呼ばれる保育所、5～6歳の子どもは幼稚園に通う。これらの施設は異なる政府機関の管轄となっている。すなわち、TASKAは女性・家族・地域開発省社会福祉局、幼稚園は教育省の管轄下にある。

カリキュラムに関しては、0～4歳児向けのPERMATAと、5～6歳児向けのNPSC（就学前教育標準カリキュラム）という2つのナショナルカリキュラムがある。NPSCは、効果的なコミュニケーション、肯定的な自己概念と自信の育成、クリティカルシンキングと問題解決スキルの促進などの目標を重視している。中でも「個人的能力」の項目では、社会情動的発達、人間関係スキル、リーダーシップに重点を置いている。

マレーシアの幼児教育は、安全で豊かな環境の中で、子どもたちの身体的、感情的、精神的、知的、社会的側面を総合的に発達させることを目指している。カリキュラムでは、楽しく、創造的で、有意義な活動によって、子どものスキルを向上させ、自信や肯定的な自己概念を高め、子どもが困難に対処し、そこから学ぶ力を育むことを重視している。集団活動に適応し、困難に立ち向かい、学習に意欲をもち、将来の教育段階へ円滑に進むことができるよう、自信をもってコミュニケーションをとれる子どもを育てることが求められている。

幼児期におけるレジリエンスと、関連する社会情動的スキルの発達

5～6歳児向けのNPSCカリキュラムと0～4歳児向けのPERMATA Negaraカリキュラムのいずれも、幼児期の発達におけるレジリエンスと社会情動的スキル（SES）の育成を明確に重視している。NPSCでは特に、円滑なコミュニケーション、チームワーク、道徳的な行動、共感力などの資質だけでなく、「berdaya tahan（レジリエンス）」の高い子どもを育成することの重要性を強調している。NPSCカリキュラムで定義されている「レジリエンス」とは、子どもが知恵、自信、寛容、共感をもって困難に立ち向かい、乗り越える能力を意味する。

PERMATA Negaraカリキュラムでも同様に、自信や自立心などの資質とともに、レジリエンスが高い子どもを育成することの重要性を強調している。PERMATAカリキュラムではレジリエンスを「berjati diri」、すなわち、肯定的な自己概念をもち、新しいことに取り組む意欲があり、リスクを恐れずに挑戦すること、と定義している。これらの定義はいずれも、子どもが勇気、適応力、自信をもって困難、挫折、不確実性を乗り越える能力の育成を重視したものとなっている。

マレーシアでは、レジリエンス育成の要素を幼児教育のカリキュラムに組み込むことで、子どもが幼年期だけでなく学齢期を過ぎても成長するために必要なスキルと思考力を身につけることを目的としている。この包括的なアプローチは、認知、感情、社会的側面にわたるレジリエンスの多面的な性質を認識したものである。さらに、幼少期からレジリエンスを育むことで、人生の避けられない浮き沈みに対処する準備ができるようにし、健全な適応メカニズムを育て、将来の困難や機会に対してレジリエンスのある視野をもてるようにする。



マレーシアの調査結果のポイント

①「社会情動的スキル」「レジリエンス」の用語の認知・解釈

保育者たちが社会情動的スキルとレジリエンスを子どもの社会的インタラクション、感情の制御、適応的な対処法のための重要な基礎能力として認識していることが明らかになった。また、様々な情報源を活用して理解を深め、効果的な教育的アプローチを実践していることも確認できた。

②園におけるレジリエンスを育む実践・活動の実施状況

一方、正規のレジリエンス評価ツールが欠如しているため、保育者が保護者にフィードバックを提供する際には自身の観察、判断力、一人一人に合わせたコミュニケーション戦略に依存している、などの課題も判明した。保育者の中には、マレーシアの幼児教育現場における社会情動的スキルとレジリエンスの理解と実践を促進する重要な要因として、文化的および言語的な視点を指摘する者もいた。レジリエンスを育成するために幼児教育・保育施設で取り入れているアプローチに関しては、ソーシャルサポートネットワークの構築、感情制御スキルを教えること、子どもの自立心や自信の強化などが挙げられた。こうした取り組みは最終的に子どもの包括的な発達と将来の成功に貢献すると考えられている。



2-5 フィリピン

カリキュラム・ガイドライン内でのレジリエンスや関連する社会情動的スキルの扱われ方

MATATAGカリキュラムは、元来、フィリピンの価値観と愛国心を根付かせることを目的としていたが、次第にパンデミックを含む様々な困難を乗り越えるためのレジリエンスが含まれるようになった（Zara他、2022）。フィリピンの「2030年に向けた基礎教育開発計画」では、世界的に通用する競争力と高いレジリエンスを備えた若者を育成する変容的教育に重点を置いている（教育省、2024）。

MATATAGはフィリピン語で「レジリエンス」を意味する言葉であるが、新しいカリキュラムの4つの柱を示す頭字語でもある。

MA

MAke the curriculum relevant to produce competent and job-ready, active, and responsible citizens
(有能で即戦力となる人材で、積極的かつ責任感がある市民を育成するカリキュラムを作る)

TA

TAke steps to accelerate delivery of basic education facilities and services
(基礎教育施設とサービスの提供を加速化する対策を講じる)

TA

TAke good care of learners by promoting learner well-being, inclusive education, and a positive learning environment
(学習者のウェルビーイング、インクルーシブ教育、肯定的な学習環境を促進することにより、学習者を大切に扱う)

G

Give support to teachers to teach better
(教師がより良い指導を行えるようサポートする)

社会情動的スキルとレジリエンスを育むための戦略は、主に価値教育の科目に含まれている。ただし、クリティカルシンキング、意思決定、問題の処理能力、創造力、柔軟性のスキルは、同カリキュラムの他の科目に組み込まれている。

文化的・地理的背景とレジリエンスの関連

フィリピンは独特の地理的、文化的背景をもち、頻繁な暴風雨や貧困などの困難がある中で、国民のレジリエンスが育まれている。子どもの発達におけるレジリエンスは、包括的なウェルビーイングの育成を目指すフィリピンの教育政策とカリキュラムで特に重要視されている。先行研究では、学校での「レジリエンス」の育成と「社会性と情動の学習（SEL）」の促進における感情的知性の役割が指摘されている。さらに、フィリピンでは、学習者のレジリエンスを育むために、支援的環境の構築と地域支援の活用に優先的な重点を置いている。



フィリピンの調査結果のポイント

①「社会情動的スキル」「レジリエンス」の用語の認知・解釈

ケーススタディ・インタビューを行った結果、保育者たちの「社会情動的スキル」と「レジリエンス」という用語に対する理解度にはばらつきがあり、包括的な理解の必要性が明らかになった。保育者たちは、子どもの発達における社会情動的スキルの重要性を認識しており、これらを感情制御、社会的インタラクション、人間関係の構築と関連付けている。レジリエンスに関しては、保育者たちは、困難な状況から学び、適応力と勇気を発揮する能力であると認識していた。

②園におけるレジリエンスを育む実践・活動の実施状況

またこの調査では、レジリエンスの育成を目的とした教育プログラムや教材、さらには修復的対話、ピースサークル(peace circle)、ピースコーナー(peace corner)など、保育者たちが子どものレジリエンスを育成するために行っている活動や実践についても調査した。総じて、この調査の結果は、子どもの包括的な発達とウェルビーイングを支援するために幼児教育においてレジリエンスと社会情動的スキルを育成することの重要性を強調するものとなった。また、複数のケーススタディを分析した結果、異なる園に勤める様々な年齢の保育者たちが異なる認識をもっていることが明らかになった。





2-6 シンガポール

カリキュラム・ガイドライン内での社会情動的スキルの扱われ方

シンガポールにおける幼児教育（ECE）の発達には、政策イニシアチブ、社会的な価値観、教育実践の動的な相互作用を象徴するものであり、将来の国家繁栄の原動力となる幼児の育成に重点を置いた政府の取り組みを反映している。シンガポールにおける幼児教育の特徴として、学力重視と社会情動的発達を統合した包括的なアプローチが挙げられる。こうしたアプローチにより、生涯にわたる学習と包括的なウェルビーイングの基盤形成を目指す。近年のカリキュラムフレームワーク「幼い学び手を育てる（Nurturing Early Learners）」（NEL、2022年）では、「社会情動的スキル」と「楽しむ学習者」の育成に重点が置かれるようになっている。また、すべての子どもが生い立ちや能力に関係なく質の高い教育と支援を受けられる「包括性」を認識することが、シンガポールにおける幼児教育理念の中核となっている。

保育・幼児教育への投資と施設

元来、シンガポール建国の始祖たちは、この島国にとって「唯一の資源は人材」であることを説いてきた。そのため、シンガポール政府は、1965年に独立して以来、重点的に教育への投資を行ってきた。幼児教育（ECE）分野の主要な投資としては、幼年期開発局（ECDA、2013年設立）および全国幼児教育研究所（NIEC、2019年設立）が挙げられる。

ECDAは保育所や幼稚園を規制・監督する機関、NIECは保育所と幼稚園の教員を養成する機関として設立された。保育所は生後2か月から6歳までの子どもを対象に朝7時から夕方7時まで、幼稚園は3歳から6歳までの子どもを対象に1日4時間の保育サービスを提供する。

1980年代初期には幼児教育・保育施設の数が90であったのが、現在では1,665の保育所と344の幼稚園までに増えている。教育省（MOE）もまた、43の幼稚園を運営しており、2027年までに17の幼稚園を新設する予定である。従って、2027年までに、政府（MOE）の運営による公立幼稚園の数は60となり、そのほかは引き続き私立の幼児教育施設として運営されていく。ただし政府は、国民すべてが質の担保された幼児教育施設を手頃な料金で利用できるよう、Anchor Operator（AOP）やPartner Operator（POP）の制度下の施設運営者に助成金を支給しており、利用料金に上限を設定している。AOPは地域社会へのサービスに重点を置く大手幼児教育施設の運営母体で構成され、POPはこれより小規模で、少なくとも300人の子どもを受け入れている幼児教育施設の運営者で構成される。現在、シンガポールでは、AOP系が600園、POP系が323園運営されている。その他は、独立した私立の幼児教育・保育施設である。これまで幼児教育は民間事業で占められていたが、シンガポール政府は人材育成における幼児教育の重要性を認識するようになり、最近では子どもたちの潜在能力を引き出すという目標のもとに多額の投資を行ってきた。



シンガポールの調査結果のポイント

①「社会情動的スキル」「レジリエンス」の用語の認知・解釈

調査対象の保育実践者が社会情動的スキル（SES）、社会情動的発達（SED）、およびレジリエンスの概念に慣れ親しんでいることが確認された。

管理職は社会情動的スキルとレジリエンスの意味を深く理解しているようなので、その点で果たす役割も大きい。保育者たちは各々異なる側面について回答したが、管理職は包括的に意味をとらえることができる。一方、保育者たちは、社会情動的スキルとレジリエンスが高い子どもが保育室でどのように行動するかについて具体例を挙げることができる。従って、管理職と保育者は互いに多くのことを学びあうことができると思われる。

②園におけるレジリエンスを育む実践・活動の実施状況

しかしながら、一般に、社会情動的スキルやレジリエンスを促進する特別なプログラムや構造化されたプログラムは存在しない。こうしたスキルを教えることは、日常のやりとりや実践に織り込まれている。構造化されたカリキュラムや公的評価が存在しないため、子どもの社会情動的スキルの育成は、予期せぬ学習機会に恵まれた場合に行われる偶発的なものである。



2-7 台湾

台湾の幼児教育

台湾の子どもは通常、2歳から5歳の間に幼稚園に通い、毎日約8時間を学びに費やす。保育時間が長いのは、主に共働き世帯が多いためである。親たちは子どもの包括的な発達を促し、人生に対するポジティブな態度を育成するために、幼稚園に通わせることを選ぶ。その結果、幼稚園教育は、親が与える影響とは別に、子どもの人格、世界観、価値観を形成する上で重要な役割を果たしている。

レジリエンスや関連する社会情動的スキルの扱われ方

台湾の幼児教育において、社会情動的スキル（SES）とレジリエンスは比較的新しい概念である。政府の幼児教育カリキュラムには社会的スキルのみが含まれている。過去10年間、一部の高等教育機関で幼児教育における社会情動的スキルの重要性が認識されるようになった。しかし、研修に参加する保育者や園長のために社会情動的スキルを導入したワークショップが現れ始めたのは、ここ5年ほどのことである。こうしたワークショップの受講者たちは研修後に園に戻り、園の保育者たちの中で指導的な役割を果たし、社会情動的スキルの育成を促進することが望まれる。一方、レジリエンスについては、その概念を適切に説明できる者はわずかであり、台湾の幼児教育業界ではレジリエンスがほとんど知られていないのが現状である。



台湾の調査結果のポイント

①「社会情動的スキル」「レジリエンス」の用語の認知・解釈

インタビューの結果、社会情動的スキル（SES）の概念に対する現職保育者の理解は一貫していないことが判明した。ほとんどの保育者は大学課程で社会情動的スキルの理論的知識を教わっていないため、漠然とした理解しかなかった。保育者たちは社会的スキルの知識を活用して社会情動的スキルを理解しようとする傾向が見られた。

現職の保育者10名のうち、レジリエンスの概念を本当に理解しているのは半分だけであった。保育者たちは「レジリエンス」という言葉をよく知らないものの、レジリエンスやストレスへの適応力が子どもにとって重要であることは全員の一致した認識である。

②園におけるレジリエンスを育む実践・活動の実施状況

現在、台湾の教育制度は子どものレジリエンスを強化するための特別な教材や評価ツールを提供していない。しかし、保育者たちは子どものレジリエンスを育成するために、園で様々な活動を利用している。保育者の中には、子どもが困難に直面した時に大人が寄り添うことで感情が安定しやすいことが分かったのも、そういう時は子どもに寄り添うことにしていると答えた者がいた。また、子どもは仲良しの仲間とともに問題解決を試みる方が、より積極的になることが分かった、と述べていた。さらに、子どものレジリエンスを強化するためにはグループ行動モデルを構築することが重要だと強調する者もいた。保育者たちが採用している最も一般的な教育方法は、子どもが感情の変化を体験できるようなシミュレーションシナリオを作成し、挫折に耐えることでレジリエンスを育てるよう誘導することであった。





2-8 タイ

国の幼児教育カリキュラム・ガイドライン

タイの2021～2027年児童発達計画によると、幼児教育・保育（ECEC）のビジョンは、全ての子どもが潜在能力を最大限に発揮し、質の高い国民となるよう育成することである。この計画を実現するために提案された7つの戦略として、幼児向けサービスの提供、幼児のいる家族の子育て力強化、保育所の質の向上、幼児情報システムの開発と統合、幼児期関連の法令整備、研究開発の実施、手順・評価監視の管理・開発が挙げられる。このように、タイが目指す幼児のイメージは、身体、情動、規律、社会性、知性を含む全ての発達領域においてバランスの取れた子どもである。従って、就学前の0～6歳児を対象とした幼児教育・保育はウェルビーイング、教育、社会福祉に焦点を置く（教育委員会事務局（OEC）、2021）。

カリキュラム・ガイドライン内での社会情動的スキルの扱われ方

保健システム研究所（HSRI）は2017年に2～7歳児の30%に実行機能の遅れが見られると報告した。このことは、自己制御の欠如、注意散漫、集中力の低下、衝動性、怒りっぽいなどの行動上の問題につながる可能性がある。社会情動的スキルは実行機能に関連していることが知られている。すなわち、社会情動的スキルは脳機能に絡み、思考プロセスへと誘導する（HSRI、2017をPhromkat、2023で引用）。実行機能は学習や仕事で達成する一連のメンタル・プロセスである。理性的に思考する力、抑制制御、感情や行動を制御し、計画を立て、注意を払い、指示を記憶し、順番に作業する力は全て実行機能によるものである。従って、実行機能は目標を達成するために思考、感情、行動を制御する脳の力である（Pokam、2020）。その結果、タイ教育省（MOE）は、幼児教育・保育プログラムの有効性を向上させ、幼児の発達の遅れという問題に対処するために、実行機能を非常に重要視している。

2020年以降、タイ教育省は、0～8歳児全員の身体的、情動的、社会的、知的発達に自己教育と実行機能を追加して、バランスのとれた発達に重点を置いた幼児教育政策を発表している。幼児教育・保育プログラムに期待される成果とは、子どもが自尊心、自信、自己効力感、自己抑制を身に付けるように育てることである（MOE、2020）。

コロナ禍が及ぼした影響

タイの教育委員会事務局（2022）によると、あらゆるレベルの学習者がコロナ禍の影響を受けたとしている。オンライン学習によってストレス、不安、集中力の低下、学習に対する関心や意欲の欠如、社会的スキルの低下が生じたからである。幼児の失われた学びを取り戻すための対策として、学習プロセスの再設計、子どもの潜在能力を引き出す保育者や園長のスキル育成、効果的な学びのための学校、家族、地域社会、関連セクターなどの関係者との連携、前向きな姿勢と心身のウェルビーイングの重視などが挙げられる。2024年2月、タイ教育省は、スクリーンタイム（デバイスを視聴する時間）の増加に伴い、育児の新たなキャンペーン「3つの促進、3つの削減、3つの増加」を提案した。この政策は、健康な幼児の発達を促進するための教育委員会事務局（OEC）の対策とも合致している。「3つの促進」では、保護者、保育者、地域社会の正しい理解の向上、児童福祉の適切な改善、地方自治体や地域社会の強化、「3つの削減」では、スクリーンタイムの50%削減、児童の幸福を取り戻すことによるストレスの削減、子どもに対する身体的および精神的な暴力の削減が挙げられている。一方、「3つの増加」では、音楽、スポーツ、体操など、幼児向けの遊びに基づく活動を増やす、物語の読み聞かせ時間を増やす、家族と過ごす時間の質を向上させることが提唱されている（MOE 360、2024）。



タイの調査結果のポイント

①「社会情動的スキル」「レジリエンス」の用語の認知・解釈

回答データの結果、タイの保育者は、子どもが幸福で成功した人になるための重要なスキルとして、社会情動的スキルとレジリエンスを重視していることが判明した。保育者11名のうち2名は「レジリエンス」という言葉を聞いたことがなかったが、「社会情動的スキル」については全員がよく知っていた。社会情動的スキルは社会情動的な発達に関連するものとして、タイの2017年国家幼児教育カリキュラム(改訂第2版)に記述されている。

②園におけるレジリエンスを育む実践・活動の実施状況

社会情動的スキルとレジリエンスを育成する取り組みは、次の3つの側面から構成される：1) 物理的環境：居心地の良い家庭的な環境や広いプレイルームなど、2) 活動：芸術的活動、マインドフルネス・トレーニング、7つの習慣、実行機能、感情に関連した物語、自由遊び、音楽と運動、料理、感情カードを使った感情のチェックインとチェックアウト、感情日記、タイの伝統的なゲームやボードゲーム、自己評価ワークシートなど、3) 保育者による指導：模範を示す、前向きな規律、クラスのルールづくり、適切なタスクの割り当て、感情を認識する方法の指導、個人／ペア／グループでの作業割り当て、バディ制度の採用など。

【出典】サシラック・カヤンキジ (2024). 【タイ】 幼児のレジリエンス育成におけるタイの保育者の視点.
<https://www.blog.crn.or.jp/lab/10/56.html>

